

March 2017

# 京都大学総合博物館 ニュースレター



京都大学熊野構内から出土した瓦（特別展「文化財発掘Ⅲ―激動の幕末と京大キャンパス―」において展示中）  
（2 ページに関連記事）

## 平成 28 年度特別展

「文化財発掘Ⅲ―激動の幕末と京大キャンパス―」.....	2
「日本の表装―紙と絹の文化を支える―」.....	3
2016 年夏の曝涼.....	4
大地は語る 2016 地球大分解.....	5
招へい研究員.....	6
研究資源アーカイブ通信	
河合雅雄資料：霊長類学関係，1959-1975.....	6
総合博物館日誌（平成 28 年 11 月～平成 29 年 2 月）.....	8

平成 28 年度特別展

## 文化財発掘Ⅲ—激動の幕末と京大キャンパス—

開催期間：平成 29 年 2 月 15 日（水）～ 4 月 16 日（日）

京都大学総合博物館でおこなわれる特別展「文化財発掘」も、今回で 3 回目の開催を迎えた。学内には地中に貴重な文化財が埋もれている。それらの調査・研究・保管・活用を行うのが、京都大学文化財総合研究センターの役割であり、一昨年より、その調査成果の一部を総合博物館での特別展において、ひろく一般の方々に開示している。

さて、これまでの特別展でとりあげられたのは、古墳時代（第 1 回目）と弥生時代（第 2 回目）であった。今回扱う時代が「幕末」とであると聞いて、驚かれた方も多いことだろう。「考古学」の扱う範囲はひろく、このような私達の生きる時代から遠く隔たらない時代についても研究の対象とされ、その時代の資料の分析によっても歴史研究の上でのあらたな知見がえられるのである。

今回の特別展では、おもに幕末の「藩邸」をとりあげた。「改正京町御絵図細見大成」などの幕末に描かれた絵図をみると、当時の鴨川の東に、幕末より前の時代には存在しなかった各藩の藩邸が並んでいる。朝廷の所在する京都が、幕末に日本中の人々の関心の的となったことがよくわかる。絵図の中で、現在、京都大学吉田キャンパスがある一帯に目を向けると、そこには土佐藩邸（「土州屋敷」）や尾張藩邸（「尾張屋敷」）が描かれる。これらの藩邸については、これまでにおこなわれた発掘調査で、その実在が証明されている。また、2015 年に熊野構内でおこなわれた発掘調査でも、幕末頃の瓦積遺



京都大学熊野構内で検出された瓦積遺構

構が発見された。この遺構が、絵図に「阿州屋敷」として描かれる徳島藩邸と関係するのではないかと、注目を集めている。

あらたに発見されたこの遺構に含まれていた瓦が、今回の特別展の目玉の 1 つである。遺構からは、迫力のある鬼瓦や草花の紋様をあらわした道具瓦、家紋瓦などがみつかった。初公開となるこれらの資料をご覧いただき、京大キャンパス内での埋蔵文化財調査によって、歴史研究上のあらたな発見がなされていることを知っていただきたい。

今回の特別展で注目してもらいたいもう 1 つの特徴は、展示を通して、幕末における京都と他地域のつながりがみえてくる点である。扱った舞台は幕末の京都だが、京都の藩邸で生活していたのは、他地域からやってきた人々である。藩邸跡出土の遺物の内容にも、このような事情は色濃く反映される。土佐藩邸や尾張藩邸の屋根を葺いていた瓦は、それらに残された刻印から、国元の土佐や尾張で作られたものであることがわかる。また、尾張藩邸跡からは、尾張で作られた陶器がみついている。これらの資料を通して、幕末における京都と他地域の交流の実態を感じとっていただけたら幸いである。

さらに今回は、藩邸に関係する絵図をも展示した。愛知県公文書館より、尾張藩邸内の施設の配置図を描いた「吉田御屋敷之図」をお借りし（公文書館外初公開）、また、京都大学附属図書館より、前述の「改正京町御絵図細見大成」をお借りした。これらの絵図と、実際に検出された遺構や出土した遺物の対照を通じて、多角的な視点から、幕末の京大キャンパスに思いを馳せてほしい。

最後に、今回の特別展の開催にあたり、京都大学総合博物館の方々にはひとかたならぬご協力をいただいた。感謝の意を表したい。

（文化財総合研究センター助教 内記 理）

平成 28 年度特別展

## 日本の表装—紙と絹の文化を支える—

開催期間：平成 29 年 1 月 11 日（水）～ 2 月 12 日（日）

2003 年 3 月、修理を終えたマリア十五玄義図が帰ってきた。見違えるような姿に、正直とまどった。この美しい絵は、屋根裏から竹筒の中で丸められた状態で見つかった。波打つ表面のしわや亀裂、表装の傷みは、発見の物語とあいまって、厳しい弾圧の下で信仰を守った人びとの心を伝えていた。それが失われたことにたじろいだのだ。こうして、修理するということはどういうことなのかを考えるようになった。

表装された文化財の修理をテーマとする本展覧会の前半、「モノは傷む」「だから直す」という二つのパートで伝えたかったのは、文化財の修理は、そう単純に割り切ることのできない営みである、ということだった。「なぜ残るのか」「何を残すのか」「何を变えるのか」という問いをたて、修理現場での、唯一無二の個性を持つ文化財との格闘を展示した。普通では考えられないような、傷みに傷んだ作品も思い切って展示した。後半の「歴史をたどる」のコーナーでは、過去の修理の跡の残る資料群を並べ、修理を、時代と社会に規定される文化としてとらえなおした。

誰も見たことのない展示を作ろう。これを合言葉に、1 年半、京都文化博物館の森道彦氏、国宝修理装演師連盟の岡泰夫氏、橋本浩氏、山本記子氏、京都府文化財保

護課の中野慎之氏、京都府立大学の横内裕人氏とともに、議論を尽くした。共同開催の京都文化博物館総合展示「日本の表装—掛軸の歴史と装い」とともに、多くの方に見ていただくことができ、本当に嬉しかった。

本当に、というのには理由がある。この展覧会を、修理技術者のことを知ってもらう機会にしたいと思っていたからだ。研鑽を積み、気の遠くなるような時間をかけて、彼らは、先人たちが残してきたモノを直し、未来へと伝える。目立たない、しかし、大切な仕事だ。表に出ることを好まない彼らを、一人でも多くの人と応援できればと願う。

ここで、マリア十五玄義図の修理をめぐる、展覧会で立てた三つの問いに答えてみたい。「何を残すのか」私たちが残したのは、虐げられたキリシタンの信仰を支えた美しい絵。「何を变えるのか」放置すれば、致命傷となるだろう傷みをすべて補修した。「なぜ残るのか」修理で外された古い裏打ちは、キリシタンが拙い手で何度も何度も手当して守ってきたことを教えてくれた。あの時の修理をこうして客観視できたのは、個人的な、しかし、大きな展覧会の成果だった。

（総合博物館長・教授 岩崎奈緒子）



展示風景

マリア十五玄義図  
発見された頃（左）と修復後（右）



## 2016 年夏の曝涼

曝涼<sup>ぼくりょう</sup>という言葉がある。「日本の表装」展の関連講演会で、久々にその言葉を聞いた。横内裕人京都府立大学准教授が、18世紀中頃に、勸修寺で文書の修理事業を進めた賢賀<sup>けんが</sup>が、修理した後こそ、怠りなく曝涼し、心を配って世話をしなさい、というメモを残していたと紹介したのだ。

1年に1回、カビや虫の害を防ぐために、衣服や書物、調度品を曝涼＝虫干しする習慣は、私が子どもの頃には、まだ生活の中に残っていたように思う。土用干しともいうが、必ずしも夏に限らず、さわやかな気候のいい時期に、衣服や書物を出してきて風をあてた。

昨年8月の末、総合博物館北棟の収蔵庫の一部で、曝涼を行った。外の空気に当ててはいないので、曝涼と言うのは正確ではないが、民具類を収める収蔵庫からモノを出し、ホコリを払い、カビはアルコールで拭き取った。床も棚も、収蔵庫はすべて掃除した。

いったん置いた場所から一度も動かしたことがないものもあったかもしれない。総勢29人が2日間、ホコリにまみれて作業した結果、部屋のカビ臭さは消えてなくなり、くすんで見えた収蔵品は見違えるように美しく、輪郭がはっきりした。

建設以来30年を経過し、北棟では様々な問題が生じている。最大の悩みがカビだ。主に和装本を収蔵する部屋で大量のカビが発生したのは、14、5年前、着任後2、3年の頃だった。どうしたらいいか途方に暮れた。紙の資料を収める収蔵庫は他に4室。この事件をきっかけに、毎夏、すべてのモノを部屋から出して二酸化炭素で燻蒸し、部屋の方も清掃し、防虫剤を噴霧する作業を、一室ずつ進めていった。



収蔵ケース内部の清掃



版木のカビ除去

併行して悩まされたのが、先の民具の収蔵庫にある版木のカビである。学生アルバイトを動員してアルコールで落としても、翌年になると元の木阿弥で、徒労感ばかりがつのった。見かねて救いの手を差し伸ばされたのが、伝統文化財保存研究所代表の石川登志雄先生だった。

聞けば、京都造形芸術大学におられた頃の受講生を集めて、京都の寺や神社の蔵の掃除を請け負っているのだという。こちらで準備するのは、掃除道具と宿泊場所のみ。交通費は自己負担なのに、昨夏は、東北や東京、九州からの参加もあった。石川先生の指示の下、手慣れた様子でてきぱきと作業は進められた。全日参加して、清々しい気持ちになった。そして、心を配り身体を動かすという行為の重なりが、モノを残してきたのだ、と確信した。

近年、博物館の収蔵環境をめぐるには、IPM＝総合的有害生物管理という考え方が普及している。かつて主流だった薬剤による害虫駆除という方法が、オゾン層破壊物質として薬剤が全廃され維持できなくなったことに伴う動きで、人の目と手で、点検し清掃することにより、被害を未然に予防するという考え方である。

しかしこれは、250年前に賢賀が書き残したことと同じではないか。正倉院の曝涼は平安初期に始まったというから、賢賀の言の背景には、長い経験の蓄積がある。総合博物館に勤務して16年。博物館の機能の核心は、モノを未来に伝えることだと思う。先人の知恵と、昨夏の曝涼で流された汗に触れ、心と体を存分に使って、博物館の大切なつとめを果たしていきたい、と改めて思った。

(総合博物館長・教授 岩崎奈緒子)

## 大地は語る 2016 地球大分解

平成 28 年 11 月 20 日に総合博物館にて、ロビーとミュージアボを用いたイベント「大地は語る 2016 地球大分解」が催されました。このイベントは京都大学大学院理学研究科地質学鉱物学教室と京都大学総合博物館が共催するもので、もともとは 5 月 10 日の「地質の日」に関連して毎年 5 月に催されてきました。「地質の日」とは明治 9 年 5 月 10 日に日本で初めて広域的な地質図が作成されたことにちなんでおり、毎年「地質の日」を記念したイベントが全国の博物館や大学などの研究機関で行われています。「大地は語る」展も、より多くの方に地質をもっと身近に感じてほしい、地質学関連の研究がどのようなものか知ってほしいといった思いで開催されてきました。今年度は 11 月 20 日の「関西文化の日」に開催されたこともあり、より多くの方に足を運んでいただくことができました。

当日は、ロビーにて地質学鉱物学教室の大学院生らを中心に研究分野ごとの展示や、ポスターを使った研究紹介が行われました。今回のテーマはスケールの違いで、入口から順に、地図スケール、手のひらスケール、顕微鏡スケールといった地質学ならではの、視点の違いが活かされた展示企画です。実際に岩石や骨に触れることのできる展示や、顕微鏡を覗いてもらうコーナーでは始終来場者の方々の驚きの声にあふれていました。また、展示やスタンプラリーを楽しむ小中高生と共に、多くの大人の方々にも地質について学んでいただき、楽しんでいただくことができました。特に大学院生によるポスターを使った研究紹介では、来場者の方と大学院生との活発な意見交換が行われておりました。そして、ミュー



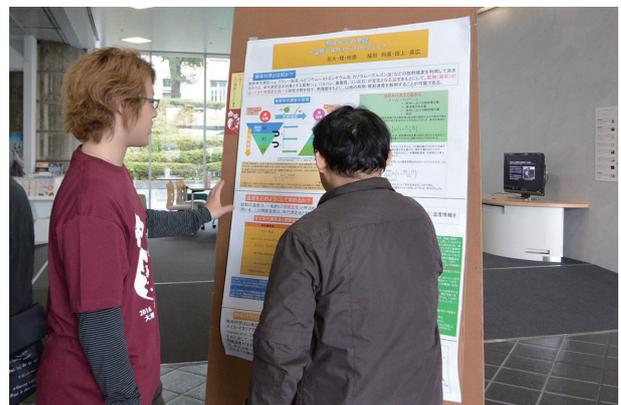
ミュージアボでの講演

ズラボでは地質学鉱物学教室の院生らによる講演が行われ、新井貴之さんの「木から昔の天気を探る～年輪気候学へのいざない」、菊池一輝さんの「生物の“行動の化石”—生痕化石から過去を探る—」、安本篤史さんの「石水の交わり～仲よきな石と水のはなし～」といった題目で最新の研究成果をわかりやすくお話ししていただきました。多くの方々に講演を聞いていただくことができ、地質学をより身近に感じていただくことができたのではないのでしょうか。そして、自身が行っている研究の話を来場者の方々に聞いていただくことは、院生らにとってもかけがえのない経験となったに違いありません。「大地は語る 2016 地球大分解」を企画し、尽力した地質学鉱物学教室の大学院生らに謝意を表すると共に、今後この「大地は語る」展が手探りながらも継続・発展し続けることを期待しております。

(総合博物館 助教 白勢洋平)



ロビー展示



ポスターを使った研究紹介

客員教授 張 鵬 (Zhang PENG, 平成 28 年 8 月 1 日～平成 29 年 2 月 28 日)  
中華人民共和国中山大学人類学系・教授

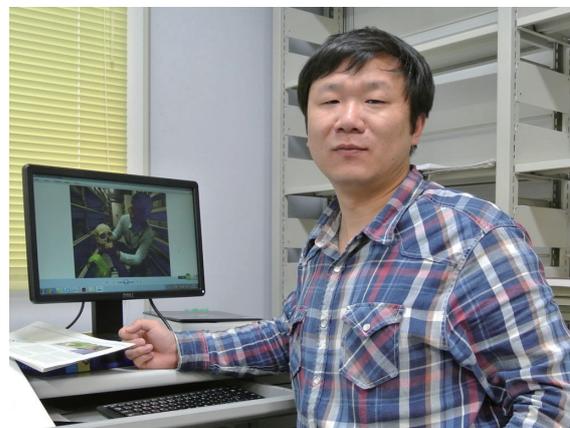
## The Kyoto University Museum as a WINDOW

Our career is a journey and the most excited thing in the journey includes returning to where it all started: our alma mater. My Alma Mater is Kyoto University, one of Asia's leading research-oriented institutions and has cultivated many world-class researchers including nine Nobel Prize laureates. I love and be proud of it. In 2004 a Year of Monkey, I became a graduate student studying primates in Kyoto University at age of 26. In this University, I received Ph.D, JSPS postdoctoral, professorship in a Chinese University, and built a warm family with a beautiful lady and two kids. In 2016 again the Year of Monkey, I was appointed as a visiting professor by my Alma Mater. I am appreciate for Professor Motokawa Masaharu to accept me in his lab from August 1 in 2016 to February 28 in 2017.

The WINDOW concept was formulated by Prof. Yamagiwa Juichi, the current president of Kyoto University. He aims to provide the University as a "window" opening to society and the world. There are more than 2.6 million collection objects including national cultural treasures, internationally significant type specimens relating to the cultural, natural and technological fields in The Kyoto University Museum. The Museum also promotes the practical use for high-technology research and education, and allows access to the public. I see the Museum as a WINDOW of Kyoto University.

**W** stands for Wild and Wise. In the Museum, I discussed about wild and nature with stuffs in the Section of Field Survey and Collection Management, on the other day, I learned Wise with stuffs in the Section of Material Examination and Technical Service, and the Section of Documentation and Multimedia Information Service. I enjoyed with the special programs of the Museum, "Excavation of cultural properties" (文化財発掘Ⅲ—激動の幕末と京大キャンパス—), "The Japanese covers—the paper and silk cultures" (「日本の表装—紙と絹の文化を支える」); "To know about insects—Challenges from Kyoto University" (「虫を知りつくす 京都大学の挑戦」).

**I** stands for International and Innovation. The Museum regularly organized international symposia to extend their networks. There were International Symposium of Wood Science and Arts (国際シンポジウム「木質科学と木工芸」),



The 3rd Symposium of APRU University Museum (第3回 APRU 大学博物館研究シンポジウム), the 6th International Symposium of Asian Vertebrate Diversity (第6回アジア脊椎動物種多様性国際シンポジウム). In addition, I attended and gave a speech in several other symposiums, e.g. International Symposium on Interactions of Human, Culture and Nature Explored with University Museum Collections, in Hanoi, The Open Symposium of Understanding of Species Diversity of Mammals in Asia in Japan Mammalian Society at Tsukuba University, The 6th International Symposium on Primatology and Wildlife Science at Kyoto. I also organized the Symposium of Chinese Primate Research and Conservation in International Society of Primatology in Chicago, USA and the Annual Meeting of Chinese Primatological Society in Yunan, China.

**N** stands for Natural and Noble. The Museum provides good facilities for special programs of Children Museum (子ども博物館), Summer school of EXPO2016 (夏休み学習教室 体験 EXPO2016'夏); Introduction of University and Archeology (大学は宝箱 考古もいっぱい!). The lecture series on insects (昆虫アカデミア) were given by 13 professors from various Universities. I saw many parents and their kids enjoyed these opportunities provided by the Museum.

**D** stands for Diverse and Dynamic. The Museum represents for Diverse and Dynamic at every Conner. For example, I joined the week seminar on Zoology, which is co-organized by Professor Motokawa Masaharu from the Museum, Prof. Okamoto from Zoology Department and Prof.

Nishikawa from Faculty of Integrated Human Studies. The newly recruited staffs, Dr. Nakayama, Dr. Saito, Dr. Shirose, Dr. Yokoyama and Dr. He Kai also promote team work in diverse and dynamic studies.

**O** stands for Original and Optimistic: I was moved by original and optimistic spirits of young graduate students in the Museum. I often discuss and had parties with Saito, Makono, Tsukamoto, Jadab Biswas and other students. Ganbare (頑張れえ), I hope graduate students will enjoy your studies and have reproductive achievements. You are always welcome to contact me if you need any helps.

**W** stands for Women, Leaders in the workplace. I am surprised with female scholars in the Museum. No need to say more, the Museum director Prof. Iwasaki Naoko is the best Japanese female leader that I have ever see. Murakami Yumiko visited China for more than 20 years, and she knows more about Eastern China than I do. Hashimoto Hiroko enjoys with her work on human bones dating back to 20 thousands of years

from various countries. They represent the best female scholars in Japan.

Every 12 years is called a cycle in our calendar. From 2004 to 2016, I tried to be a window and introduced Kyoto University to many Chinese students and colleagues. I have invited more than 20 scholars of Kyoto University to visit China, and sent 9 graduate students to study in Japan. I helped to sign up Memorandum of Understanding (MoU) between institutes of Kyoto University (The Kyoto University Museum and Primate Research Institute) and those of Sun Yat-sen University in China (School of Sociology and Anthropology, School of Life Sciences). By 2028 the next year of Monkey, my plan is to set up the first Primate Research Institute in China, and to promote the MoU between Kyoto University and Sun Yat-sen University of China. I wish Kyoto University keeps leading academic in Asia and the World. I am proud of my Alma Mater Kyoto University, and hope to be a proud of you in the future.

## 客員准教授 Nguyễn Thiên Tạo (平成 28 年 4 月 1 日～7 月 31 日)

ベトナム科学技術院ベトナム国立自然博物館・自然保護部長

グエン・ティエン・タオ氏はベトナム科学技術院ベトナム国立自然博物館に所属しています。2016年4月～7月の4ヶ月間、総合博物館の招へい研究員(客員准教授)として「両生爬虫類の種多様性および博物館科学に関する研究」を行いました。世界的にもベトナムは生物多様性が高く、グエン氏が研究対象とする両生爬虫類においても毎年多くの新種が記載されています。京都大学は東アジア・東南アジアの陸上脊椎動物の多様性研究の伝統をもち、総合博物館には貴重な標本が収蔵されています。また、総合博物館を拠点機関とし、アジアにおける陸上脊椎動物の種多様性研究を対象にした日本学術振興会研究拠点形成事業B. アジア・アフリカ学術基盤形成型が展開されており、グエン氏もベトナム側メンバーとして参画しています。

今回の客員准教授としてのグエン氏の滞在では、京都大学総合博物館、人間・環境学研究科、理学研究科の関連する研究者との共同研究が大きく進み、カエル類、サンショウウオ類、ヘビ類等を対象としたいくつかの論文がまとめられました。また、本学の大学院生や研究員と盛んに学術交流やセミナー実施を行い、若手研究者の育成にも貢献しています。北海道大学、琉球大学等の他大学の研究者や大学院生との研究交流も行われました。

また、総合博物館が最近進めている分野横断型で標本資料を基盤にした博物館科学に関する議論や研究交流にも参加しました。総合博物館が2016年10月にベトナム・ハノイで開催した「大学博物館のコレクションから探る人間・文化・自然の相互作用に関する国際シンポジウム」はグエン氏がベトナム側の事務局を担い、滞在期間中の相互議論がシンポジウムの成功につながりました。また、滞在中の4月には文化史・自然史の双方を含めたベトナム国立自然博物館からの訪問団との学術交流も実現しました。今後のさらなる学術交流や共同研究の展開が予定されています。

(総合博物館教授 本川雅治)



研究資源アーカイブ通信

## 河合雅雄資料：霊長類学関係，1959–1975

本デジタルコレクションは、河合雅雄氏による1959年のアフリカでのゴリラ調査、1973年以降に行われたエチオピアのゲラダヒヒの調査資料群を中心とし、フィールドで撮影・録音された写真、映画フィルム、音声テープなどからなる。各資料には河合氏本人の解説が加えられ、現在、京都大学デジタルアーカイブシステム Peek を通して Web で広く公開されている。

コレクションの構築は、河合氏の半世紀に及ぶさまざまな研究の中から、研究資源アーカイブの趣旨に合致する対象群を選び出すことから始まった。氏の研究出発点である飼いうさぎ社会の研究における写真や、フィンランドのトナカイの社会生態を対象とした写真群は今回の対象に含められなかったが、本デジタルコレクションに選んだ資料群こそが将来の新しい教育・研究にひらかれる可能性が高いという、河合氏と研究資源アーカイブの両者の判断に基づいている。

1959年に実施された日本モンキーセンター第二次ゴリラ探検の資料を把握するには、16 mm フィルムをデジタル化した約34分のカラーの映像資料が参考となる。映像には、調査の様子のほか、約60年前の現地の民俗

や自然が色鮮やかに記録されており、新たに付された河合氏のキャプションを照らしつつ視聴することができる。本映像は、当時まだ珍しかったアフリカの様子を帰国後に分かりやすく紹介する目的で編集され、実際の調査行程とは異なる時系列となっている。野生マウンテンゴリラの生態を世界で初めて捉えた写真は、45本のモノクロネガフィルム資料の一部であり、同ネガのコンタクトプリントを貼りつけたアルバム資料でも見ることができる。アルバムには、少年漫画誌への提供カットを示す書き込みなどの資料使用の履歴が残り、社会との関わりを重視しながら研究をすすめた研究者の姿を垣間見ることができる。ゴリラ追跡中の様子は、谷の斜面上に捉えたシルバーバックの写真、ゴリラの咆哮音を録音した音声テープ、竹藪の暗闇の先にゴリラを捉えた映像の3種の記録媒体に残されている。

1973年以降の調査資料群は、エチオピア北部の台地にすむゲラダヒヒを対象とする。ユニット、バンドからなる特異な重層社会構造をもつゲラダヒヒ、自然状態でのハイブリッドヒヒについては氏の研究グループが発表した種々の論文・書籍に詳しく論じられている。本資料



第二次ゴリラ探検アルバム（部分） 資料 SCI MIXED 2011/1 / 1/1/2/1(17) [見開き 16] ネガスリーブ 558, 559 対応分



ノートを出して記録する河合 資料 SCI MIXED 2011/1/3/7-9「ゲラダヒヒの社会, セミエン (1973-1974) 素材」フッテージ 7-9, 5'44"

群には、多くのカラーズライド写真が含まれる。連続する6コマで扱われるネガとは異なり、マウントされ個別に扱われるスライドは、活用頻度が高いほど、もとの撮影時系列を復元することが困難となる。そのためスライド資料については、氏の研究関心に基づいた12の分類で整理し、対象の特徴をよく記録しているスライドを河合氏に選別していただく手法をとった。

本資料群に含まれる映像資料には、「研究生活の中で最も幸せな調査だった」と氏が述懐されている世界一雲がとりまく台地上の禾本科草原に展開するゲラダヒヒの群れと、群れに溶け込んで観察する研究者の姿を見ることが出来る。河合氏は、科学論文では扱えない、しか

しながらフィールドで感得しうるある種の確からしさを、科学的考察をもとに動物記として著す—ネオ・シートニズム—による著作を数多く発表されてきた（『河合雅雄の動物記—ゲラダヒヒの星』等）。本映像資料は、こうした動物記に対する文学研究にもひらかれているのではないだろうか。

上述のゴリラ、ゲラダヒヒ以外の調査資料も本デジタルコレクションに含まれる。幸島のニホンザルのインセストに関する映像、インドのハヌマンラングールの映像は、研究用資料としてのみ公開しているが、映像に記録されていなければ信じられないような現象がとらえられている。

本コレクションではもう一つの「残す」取り組みが行われた。本研究資源化プロジェクトの代表であった山極総長（当時、理学研究科長）の発案で、河合氏と山極氏、河合氏と大野照文氏（当時、総合博物館長）の2つの対談を撮影した。それぞれ日本の霊長類学史と博物館をテーマとした内容だが、山極総長の意図は「アーカイブで大事なものは資料だけではない。人（ひと）。河合さん、つまり人を残す」ことにあった。撮影は本コレクション全体のイントロダクションになるようにも企画した。本デジタルコレクションと研究資源アーカイブの活動にさらに新しい息吹を吹き込むべく、現在、関係各所と協力して映像の公開準備を進めている。

（北海道大学総合博物館助教 山下俊介）



Eバンド, リーダー雄の採食

資料 SCI MIXED 2011/1/1/2/1/4/ 2-2 [スライド] IV 生態

## 総合博物館日誌（平成28年11月～平成29年2月）

## 展示

平成28年度特別展「日本の表装一紙と絹の文化を支える」

平成29年1月11日(水)～2月12日(日)  
＜関連企画＞

□土曜連続講演会 1月14日(土)「表具師から装演師へ」岡 興造(岡墨光堂会長) / 1月21日(土)「日本の文化財の修理をめぐる一彫刻の修理の場合」根立研介(京都大学大学院文学研究科 教授) / 1月28日(土)「古文書修理の歴史と理念」湯山賢一(奈良国立博物館 館長) / 2月4日(土)「前近代における書跡・古文書修理の諸相」横内裕人(京都府立大学文学部 准教授) / 2月11日(土)「近世ヨーロッパ美術と修復」平川佳世(京都大学大学院文学研究科 准教授) / 2月11日(土)「平安時代の仏画制作とその修理」増記隆介(神戸大学大学院人文学研究科 准教授)

□子ども博物館「忍者の巻物を作ろう！」会期中の毎週土曜日(5回)

□展示解説 会期中の土曜日・日曜日(10回)

平成28年度特別展「文化財発掘Ⅲー激動の幕末と京大キャンパスー」

平成29年2月15日(水)～4月16日(日)  
＜関連講演会＞

□第1回 3月25日(土)「考古資料からみた幕末の京大キャンパス」内記理(京都大学文化財総合研究センター 助教) / 「文献史料からみた尾張藩吉田邸・土佐藩白川邸」笹川尚紀(京都大学文化財総合研究センター 助教)

□第2回 4月8日(土)「幕末のやきもの・蓮月焼について」千葉 豊(京都大学文化財総合研究センター 准教授) / 「幕末の動乱と坂本龍馬」宮川禎一(京都国立博物館 上席研究員)

## ロビー展示

平成28年11月20日(日)「大地は語る2016 地球大分解」(理学研究科地質学鉱物学教室との共同開催)

## イベント

平成28年11月1日(火)～平成29年3月31日(金)  
わくわくサイエンススタンプリナー

平成28年11月5日(土)  
ホームカミングデイ(入館無料)

平成28年11月19日(土)～20日(日)  
関西文化の日(入館無料)

平成29年1月22日(日)  
京都千年天文学街道・第27回アストロトーク. 講演:「2017年の天体イベントは～皆既日食 地球外生命?」作花一志(京都情報大学院大学 教授) / 4次元宇宙シアター:「3Dメガネでみる宇宙のすがた～激しい活動をする太陽～」青木成一郎(京都大学天文普及プロジェクト室 室長・京都情報大学院大学 准教授)

平成29年1月25日(水)～3月20日(月)  
京都ミュージアムロード スタンプラリー

平成29年1月29日(日)  
京都府立洛北高等学校附属中学校パネル発表 京都シニア大学講座

平成29年1月29日(日)「データから見るiPS細胞の倫理」2016年度上廣倫理研究部門年次報告会

平成29年2月4日(土)  
「観察力を鍛えるカガクノミカタ」京都府立洛北高等学校附属中学校講座

## レクチャーシリーズ

平成28年11月12日(土)

No. 143「オーロラ爆発はなぜ起こるのか?—スーパーコンピューターでオーロラ爆発の基本的な仕組みを明らかに—」海老原祐輔(京大大学生存圏研究所 准教授)

## 総合博物館セミナー

平成28年11月11日(金)

「鉱物から探る地球の歴史—リチウムペグマタイトの成因の解明—」白勢洋平(総合博物館 助教)

平成28年11月18日(金)

「Scorpionfish Biology and Biodiversity: One Taxonomist's Perspective of What We Think We Know」Stuart G. Poss(カリフォルニア科学アカデミー)

## その他

平成28年11月10日(木)

ラジャマンガラ工科大学タンヤブリ校 Prasert Prinpathomrat 学長一行来館

平成29年1月31日(火)

国立台湾大学 Tei-Wei Kuo 副学長(Executive Vice President for Academics and Research) 来館

平成29年2月27日(月)

京都府立洛北高等学校及び京都府立洛北高等学校附属中学校と京都大学総合博物館との教育・研究協力に関する基本協定書調印式

## 入館者数

10,313名 (うち特別観覧 52団体 2,497名)

発行日 2017年3月21日

編集・発行 京都大学総合博物館 電話 075-753-3272  
〒606-8501 京都市左京区吉田本町 FAX 075-753-3277

<http://www.museum.kyoto-u.ac.jp/>